
黒い会長とモヤシな俺の498日

藤森みりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い会長とモヤシな俺の498日

【Zコード】

Z0541Y

【作者名】

藤森みりあ

【あらすじ】

俺、万々原悠暉ままでらはるきは、校内でも有名なパシリ！
いつものように不良にパシられてコンビニへ行くと……、
そこには、次期生徒会長、神御藏紅かみくらべくしら科かがいて、彼女のとんでもない姿をしてしまった。
彼女もまた、俺の犯した罪を知つていて……。

秘密から始まる、不器用な一人の恋のはなし。

第一話 黒ご会議と反面（前編）

お初でじょつか (*^-^*)

違つ小説と同時進行で書き始めました。

どうかといつと更新はスローペースだと想いますが、

どうぞよろしくお願ひ致します 三一三

第1話 黒い会長と仮面

時は初秋。

この時期と言えば……大変忙しい。

普通思い浮かべる事と言えば……、

文化祭？

体育祭？

テスト？

……いやいや。

それだけではないだろ？

まだ残っている。

とっても大事な学校の威信をかけたあの行事が！――！

そう、それは……。

新生徒会役員選挙および立会演説会だ――！

今年の会長有力候補は女子生徒。

しかもトンデモ美少女である。

彼女は

2年6組 神御藏 紅科
かみくら くしな

一大企業、『神御藏カンパニー』の一人娘、いわゆる大富豪というやつだ。

そのうえ成績優秀で、運動神経も抜群にいい。柔道ではインターハイ出場経験もあるらしい。

そんな何でもかんでもするりとこなしてしまつ彼女は、勿論のこと学校のアイドルである。

そしてまた、生徒会長という立場を持つたらその人気も爆発的なものになるだろう。

俺も彼女の魅力に心奪われ、特別な感情を抱いていた一人だということは言うまでもない。

まあ、そんなことは『今までの』彼女について述べたことだ。ということは、今現在はどうなのだろうか……？

疑問は次から次へと浮かび上がる。

気になるか？

……では、語らおうではないか！
化けの剥がれた彼女の本性を……！

事の起こりは2週間前。

実は俺……、万々原 まよはら 悠暉は校内でも有名なパシリであった。

今日は何と、とんでもない命令を空き教室にて命じられていた。

「よう、ハルキー。俺え、喉渴いたやつたあ～。今から15分以内にコンビニからジュース買つてきてー」

別にもう学校は終わつていて、昼休みなどでもないから制限時間なんて設けなくともいいはずなのだが、俺が息を切らして走つてくる無様な様をコケにしたいのだろう。

教師も手を焼いている斎木さいきという不良にいつも絡まれる俺。なーんにもやつてないのにかまわれる俺つてば、超かわいそつー！

そんなことを表情にはおへびにも出でずに被害者面して、我ながら細いと思つ手を斎木へと差し出した。

「んー？ なにやつてんのー？」

もともと不細工な顔をこれでもかと重ねてわざとひじへ俺に問つた。

そんな斎木に苛つきながらもパシリはパシリうしく従順に答えて見せた。

「あの……、お金をいただかないと……。」

すると、田の前にあつた斎木の顔が、横に揺れて姿を消した。
…………と思つた瞬間！

バキッ！

鈍い音が体中を貫いた。

……いや、激しい痛みが、の間違いだ。

「…………、……」

斎木の堅く握りしめられた拳が、俺の鎖骨辺りにめり込んで吹っ飛んだ。

「調子にのってんじゃねーぞ、あん？ ハラ。そんぐらい、てめえの金使えばいいだろーが。」

微かに鉄の味がする。

恐らく殴られた際に口の中を噛んでしまったんだろう。

口角の上がった不気味な笑顔は、斎木が放った言葉よりも俺に鳥肌を立たせた。

「でも……、財布なんて、持ってきてませんし……。」

『不機嫌を煽る』と校内の不良から好評の困ったように笑う『哀愁スマイル』を斎木に見せると。

「そんな顔しても、ビートもならねえだろーがよお？ ええ？ ……ま、丁度いい。最近つまらねえと思つてたところだつたんだ。」

何もかも放り投げたかのような仕草をする斎木。

「これはもしゃ……？」

俺の苦悩の日々もつに幕を閉じるのか……。

勝手に思考を巡らせ、心躍らせる俺に『衝撃』といふ名の爆弾が降つてきた。

「ま・ん・び・き…………してこい。」

血走った田をした斎木にワナワナと震えあがり、動くこともできず
にじむと、

「もたもたしてつと、田ン玉えぐり出すぞコトハ

ドスのきいた声で脅された。

この状態の斎木に言い返したら半殺しは確実……。

そう悟つた俺は、真っ青な顔で教室を出てコンビニへ駆けだした。

走つてゐる途中に思つた。

半殺しではなくて、八分の七殺しくらいかなあ……、なんて。

学校から一番近いコンビニに着いたのは5分後。
これなら何とか間に合つ……。

だけど、万引き、か……。

人通りの多い割には空いている店内を見回して、誰も見ていないこと。カメラの死角であることを確認し、一本のジュースを手に取る。それを、ダボツとしたパークーに忍ばせ、漫画のコーナーに寄り、立ち読みする振りをしてから店を出た。

すいません、すいません……！

何度も何度も心の中で謝つた。

表しきれない罪悪感をまといながら視界に入つてきつた光景は……、

「あやあー、やめてください……！」

三人の男と、一人の女。

女の周りを、男たちが取り囲んでいる。
どうやらナンパらしい。

そして、取り囲まれている女、その人が神御藏 紅科であった。

まあ、あれだけ可愛ければ、そういうのもしようちゅうあるんだ
らうなあ……。

喧嘩は弱く、割って入る気も更々ない俺は、さらに罪悪感を積もらせながらもただ眺めることしか出来なかつた。

それに、時間が迫つて来ている。

悪いけど、俺にも俺の人生があるんだ……、「ゴメン……！」

ぐるりと身を翻し、足を一步前に踏み出したその時だつた。

「聞こえねーのか……？ やめろっつってんだろ……！」

数人の呻き声、暴力を加えられた音。

ま、まさか……！？

そんな……！ 女子に手を加えるなんて非道なことしたんじゃ……！

「神御藏さん……！？」

先ほどやりとりが行われていた場所には、男の姿は消えていた。
と、いうよ。

地面に突つ伏していた。

そして、その中心に立つて、制服の裾を直し、汚れた箇所をパンパンと払つていたのが、神御藏だった。

「 「……………」 」

なぜ神御藏さんが…………？

田を白黒させてこる俺ではあつたが、恐い／＼れば、彼女がした行為なのだら／＼。

そして多分、やつもの暴力的な発言も……。

また、神御藏は、俺に田を向け……、とこゝよりは俺の制服を見て田を見開き、顔面蒼白にしていた。

恐らく、自分が校内（といふか、校外でもだけど）どれだけ有名なのかを自覚しているのであら／＼。

もしかして俺……、見ちゃいけないもの見た……！？

出来るだけ自然に方向転換をして、早歩きでその場を去つた。

「ちよつと待つてください……！」

遠くから神御藏の声が聞こえた。

いやいや、待つわけにはいかないでしょ！

少しだけ自信のある足で、学校まで走つて戻つた。
ど／＼や／＼、こゝまではつこつこわなかつたらしい。

一安心して、ホッと息を漏らす。

これが、俺と仮面をつけない会長……、黒い会長とでも呼ぶつか。

その、運命が初めて重なった瞬間であった。

第1話 黒い会長と反面（後書き）

拙い文面ですが、温かく見守ってくれば幸いです

第2話 黒い会長と秘密の契約（前書き）

男性を書くのは難しいですね……。

頑張ります！！

第2話 黒い会長と秘密の契約

舞台は次いで、空き教室。

「おつせ——んだよ……」

憤怒を露わにした斎木が、俺に土下座をつかせ、息巻いていた。

「すいませんでした……」

頬を床に押し付けられ、必死に謝る。

「ああん……？ そんなんで足りると思つてんのかよ、『…………』

言いかけた斎木がハツと口をつぐむ。
何故なら……

「な……に、やつてるの……？」

教室の入り口に人が立っていたからだ。
それは……、

「紅科チャン……ー？」

だらしなく口元を緩ませる斎木。

いや、そこは驚くところじゃないのか？

……まあどうやら暴君でも、人並みの感情はあるらしい。

つて、そんな場合ではなくて……。

神御藏だ！

「 も、斎木くん……？ 何やつてるの……？」

眉根を寄せ、怪訝そうに神御藏が言つ。やはり、さつとき見た光景は幻であつたのであらうか。だつて神御藏は、そんな娘じやねーもん！！

「 違つ！ ちがーよ！？ 紅科チャン！」

「 何が違つの！？ 斎木くん、そんな人だと思わなかつたよー！」

スラスラと嘘を並び立てた斎木に、なんと神御藏は涙を流して非難する。しゃくり上げる神御藏に、ついに折れたらしい斎木は一つ息を漏らし、

「 ……ごめん、紅科チャン…………。もう、こんな事しねーよ」

不細工な顔を赤らめて、頭を搔きながら謝る斎木。

「 ホント？ 約束だよ……？ あたし、もう生徒会長なんだから。これからはあたしが許さないよ……？」

モジモジしながら、上目遣いで斎木を見つめて言葉を紡ぐ。

「 ああ。もう万々原にパシリなんてやつせねーし、ボコつたりもし
ねー」

うえつ！？

こりやあタナホタた

。 無事も、 神御戻に言つたんだ。 まさか破るなんてしねーたるこ

「絶対だよ？」
「どうせ原くんに何かしたら、斎木くん退学にしちゃうからな!!!」

かつ、神御藏……！

俺お前のこと大好きだセ……！

ପ୍ରକାଶକ

斎木もタジタジしながら頷く。

物の吉凶の占い、算命占卜など、

感涙してむせびそうになつた俺に、神御藏が微笑みかけた。

それは、俺の貧相な『哀愁スマイル』とは全然違う、極上の笑顔……

そうだな……、『惣殺スマイル』とでも名付けようじゃないか。

「じゃあ、その……俺、用があるからよ、行くなー。」

神御藏の『惱殺スマイル』を浴びて、ヘーヤヘーヤの斎木は口元を

まあ、とにかくにも俺のパシリ生活が終わつたんだ！
今日は、プレミアムプリンで乾杯だな。
あ、パシリから卒業させてくれた神御藏に礼言わねーと。

くるりと振り返つた次の瞬間、

「神御藏さんつ！ ありが……とう……？」

ガタツ
！！

目の前に神御藏の顔があつて、壁に押し付けられていた。

漫画とかでこのショニ見たことあるけど、役回り違うやね？

かかかかか、
神御藏さん……！？」

せべえ、俺、動搖しそうで震えてるし

「万々原くん……、やっぱ『ハビ』でわたしの『』と見てたよね？」

うわあー！

二二二

卷之二十一

「へうん」

神御藏の声なんか耳に届かなくて、曖昧な事を言つてしまつた。

「やっぱ、そうなんだあ？」

さつきとは打つて変わつて妖艶な声が放たれた。

え
?

自分の耳を疑つたが、どうやら誤りではないらしい。
神御藏に目を向け、確かめようとした途端……、

唇を押し付けられた。

アーティストが歌う歌。

……てゆうか、女の力に敵わない俺って……。モヤシすぎるわ！――！

「…………」

神御藏は、ついばみながら何度も角度を変えて俺の唇を吸い取る。 ちょっとだけいいなあとか思つてしまつたり……。

いけねー！ いけねー！！

死にしない……といふがもとモとおもに無い理性で花街魔の足を踏んづけた。

「つた……！」

神御藏は、つぶらな大きな瞳を潤ませながら

「痛いわね！－！－！」

と怒鳴つた。

いやそれ俺の台詞――！

清純なイメージの神御藏からそんな清楚さの欠片もない言葉が飛び出したのに驚愕した。

「や、やつぱりやつぱりのコンビニの女って、神御藏だったんだ……！」

もつ、『さん』をつけるのも忘れていた。

つていうことは……、何、ここに、裏表あるつてこと！？
じょじょじょ冗談じやねーよ！

俺のオアシスが……！

「つづーか、なんで俺にキス！？ どうかしてんじゃねーの！？」

「キスは、罷だよ？ あんたを落とすためのね

間髪入れずに神御藏は、悪そつに片口をあげて笑った。
あんなに激しかったのに、息一つ乱さなことじりを見ると、ここに、
相当やり慣れている……！

俺の初チューがあああ……！

「これ

神御藏がスッと取り出したのは、わざわざコンビニで俺が盗つたジュー
ースだった！

「あんた、やつき万引きしてたよね？ そのパークーに入つてたし、
盗つてるとこ見てたし。」

鏡を見なくとも、顔が引きつっているのが分かる。

「いのいとぱりして欲しくなかつたら、あたしのことも黙つててよ
ね」

鋭い光を宿したその目には、もはや優しさなど欠片も残っていなかつた。

「でも、万が一のこと考えて、あんた、いつもあたしの傍に居ること。」

そして、質の悪いあの笑みを浮かべた。

「分かったわよね？　これは契約だから。……破つたら、どうなるか。」

そこまで言つてから耳元に自分の口を近づける。

「考えておくことね

勝手にしゃべつて

勝手に出て行つてしまつた。

……と思ひきや。

「やつやつ…… あたしのことは紅科つて呼んでね。いつも傍にいるのに、名前じゃないなんておかしいでしょう、悠暉？」

「ヤリと笑つて神御藏……、いや、紅科は教室から出て行つた。

そんなこんなで俺と紅科の契約が済ませられて、波乱の日々が幕を開ける。

第2話 黒い会長と秘密の契約（後編）

ほんとうにいろいろまでを
1話にいたかつたんですね（汗）……（^-^）

第3話 黒い会長とクラスメート（前書き）

今回、~~気~~つけました。
一応毎日ちょくちょく書いてますが、
更新ペースは週1辺りになります(ーー)m

第3話 黒い会長とクラスメート

「悠暉ー！ あたし今日、生徒会で遅れるから待つてくれる？」「

俺のクラス、2-5は、紅科の隣のクラス。

教室の入り口からひょっこり顔を出して、一ツヨリ微笑む彼女。

そんな季節だ。

「分かった。何時くらいまでかかる?」

振り返り、温和な目で彼女を見つめる。

「うーん……。そうだなあ……、一応5時半くらい終わると想うけど……。あつ！ あたし、悠暉、その……、話したい事が、あつ、て……」

恥ずかしいのか、耳まで赤らめてモジモジと語尾を小さくする紅科に……、いや、俺にだろうか。いや完全に俺だな、うん。そう、俺にヒューヒューと冷やかしが飛ぶ。

「告白か――?
ン――?」

「ついに悠暉も春かー？」

「紅科チャーナン！ 超カワイイ————！！！」

年中脳内お花畠の奴らは、
どうにでも居るものなのだろうか。
呆れてしまう。

だが、同時に助かっていたのもまた事実である。

前に、斎木が紅科に誓つた事があつたのを覚えているだらうか。その時を境に俺へのパシリの扱いは殆ど過去の産物になつていた。

「じゃあ、俺口口で待つてるから。仕事、頑張つて来いよー」

そう言つた瞬間、口笛やら野次やらがピークに達した。こんなに離されても俺たちの間には何もないのに。

……そう、俺たちがこんな風に会話してるのは虚偽なのである。では何故こんな会話をしているのか……。

それは、秘密裏に契約を交わしたからである、彼女と。

実は、俺は彼女のとんでもない姿を田の当たりにして、また彼女も俺の犯した罪を知つてしまつた。

そのことは、彼女にとつて傷になる出来事であり、

俺にとつて傷になる出来事であり……。

だから、俺たちの事が他に漏れないようにと契約をしたのだ。

「悠暉？」

不意に、紅科がまた俺のことを呼んだ。

「ん？ 何……」

ふわりと、彼女の色素の薄い髪の毛がなびいた。そして俺の視界を遮る。

「ちやんと、待つてね……？」

紅科は、紅潮した頬に片手を添え、恥ずかしそうに俯きながら囁いた。

「わ、かってる……み」

思わず見とれてしまった。

彼女の美貌は、もう飽きるほど見ていた……、はずなのだが。どうやら『飽きた』なんて、永遠に無いみたいだ。

そして、そのまま俺に顔を近づけてきて言った。

誰にも聞き取れない程、小さな声で……。

「何？ あたしに惚れた？ 顔真っ赤だけど」

そうして、誰も見ていないことを知つてか知らずかほくそ笑んだ。

「あ？ んなワケねーだろーが」

まあ、小さい声ではあるが言い返した。

この女は、空氣というものが読めないのでどうか。

「氣イ、つけろよ。その口の利き方。」

女らしからぬその口調！――

いつもの優しい神御藏さんはいづこへ――？？

俺も彼女も同じ立場のはずなのに、何とも彼女の方が有利なような状況になる。

いつも。

「知つてゐるつづーの……」

結局折れた俺が、溜め息混じりに吐くと。
納得したように笑みをこぼして。

「じゃあ、ね。悠暉……」

熱っぽい田で俺のことを見つめてから紅科は教室を後にした。
いやあ、感心します！
あんたすげーーー！
それで何年嘘つき通してんだよー！
もう神だよーーー！

俺は、紅科を見送つてから、また溜め息を吐いた。

しばらく経つた。

俺は、特に何もすることが無かつたため、ボーっとしてた。

ふと、周りを見渡すともう、誰も居なかつた。

カーテンが風になびいて揺れる。
すると、好いにおいが鼻腔をつく。

振り返るとそこには……

「明日葉さん……」

「あつたよ

言葉が自然に口からこぼれた。

「うん。 祭^{まつり}でいいよ。みんなそう呼ぶ

そう言ひて二ヶコリ笑みを浮かべた。
彼女は、俺のクラスメートの明日葉^{あしたば} 祭^{まつり}。
いつも憂いを含んだ瞳で、少し話しかけにくらいイメージがあつたんだが、向こうから話しかけてくれるとは……。

「どうしたの？ 委員会？」

本当に意図が掴めなかつた俺は、彼女に問うた。
少々不躾だつたかもしね。

まあでも確かに、俺と祭は同じ委員会で。

「うん、違^{ちが}ふ。ただ、ちょっと万々原くんに、聞きたい事があつて、ね」

気のせいいか？

少し、顔が赤いような……。

「え……、何……い、い、委員会じゃねーの？」

一応。いやホントに一応。

祭ちゃんは美少女。

実際話したことはあまり無いが、
委員会が一緒……、といつのこと。
珍しい名前……、といつのこと。

カワイイな……、つていうので覚えてた。

いやー、いやいやいや、別に不純とかではねーって……！

ちょっと声上擦つただけだつて……！

「その……、わざと、神御藏さんと親しげなとこ見たから……。仲、いいのかなあ……つて」

んんー？

何コレ！？俺、ヤキモチでもやかれてんの？？

対して喋つたことねーナビコレ、脈アリつてやつか……？

……嫉妬つてヤツなのかコレは？？

「や、その……。なんていうか。仲がいいまではこかねーよ？」

ちょっと期待して言つてみた。

「そりなの？名前で呼び合つて、前髪をかき上げた。

のかなあ……つて、思つて……」

そり照れくわいに言つて、前髪をかき上げた。

仕草まで可愛すきゆよ、祭りやん……！

「何？何でそんなこと聞いたの？」

つて、赤い顔の祭ちゃんに笑い混じりに言つたら、

「万々原くん、のこと……、気になつて……」

顔が引きつるのが分かる。

まさか俺…………、紅科のこと好きとか思われてる?
思われてるのか??

「あ、のオ…………。俺、別に紅科のこと好きってワケじゅねーよ…………？」

あり得ない！！

断じてそれだけはあり得ない…………

すると祭ちゃんは、薄く涙の膜をはらんだ田で息をついた。

「そり…………な、の…………？ よかったあ…………」

「え？ 何が？」

急に泣かれるかと思つた…………。

だが、この後本当に泣きたくなるのは俺の方。

「あたし、万々原くんのこと」

そこまで言つて、急にカーラーとていう異常に顔を赤くする。

さすがにここまで来たら分かつてしまつ。

脈アリのレベルでは…………、ねーよな…………。

でも俺、そんな喋った記憶無いんだけど…………。

「その…………、万々原くんが…………、あたし、」

やばい、やばい…………！

俺までつられて真っ赤だけど…………。

ヒーリングで。

「はーるきーーー！ 生徒会終わつたあーーー！」

と教室にスキップしながら入ってきた女が一名。先ほど紹介した、空氣の読めない女である。

「紅科」

神御藏さん

お願いだから、場の空気感じ取つて！――

「あ、祭ちゃん。何かあつたの？」

と、祭に向かつて二ツ「コリ微笑む。
どうやら『惱殺スマイル』は、同性に対しても発動しないらしい。
便利な機能だなあい。

「ううん、何もないよ。」

遠慮がちに微笑むと、なんと！
教室を出て行ってしまった…………――！

廊下にパタパタと小気味よい足音が響いていた。

「おい、紅科！ てめえ……！」

初・告白を邪魔されて涙ぐむ俺。

「何？」

対して紅科は、興味もなさそうに素つ気なく返す。

「ぜつてー許せねえーーー！」

紅科の態度にも、自分の行動にも腹が立つていた。

「は？ ちよつ……ど、行くの……！」

後ろから紅糸の声がぶつかってくる。

「祭りやん」――・・・

振り向かずに、走りながら叫び返す。

そして、無我夢中になりながら彼女を追いかけていた。

第3話 黒い会長とクラスメート（後書き）

中途半端ですいません（――）

ただ、長くなりすぎてしまつたもので……。

第4話 黒い雲のまゝの1週間（前書き）

長らくお待たせしてしまって申し訳ありませんでした。お詫びして
待つていてくださいました皆さん、
本当にありがとうございました。（*^-^-*）

第4話 黒い会長と紅い彼の一週間

酸素を必死に取り込むうとし、肩で息をする。額には僅かに汗が滲み、体も若干熱を保っていた。かなりの距離を全速力で走ってきた。

一人の女の子の背中を追つて。

だが、来た道が悪かったのだろうか、彼女が早すぎたのであろうか。だが、

その姿を再び見ることは出来ずに終わった。

俺も決して足が遅いわけではない。

といふことは恐らく、前者で間違いないだろう。

「祭ちゃん……」

喘ぎながら、しかしあはつきりと名前を呼ぶ。だが、周りに誰もいないこの場所ではそれは虚しく、地に吸い込まれていくのだった。

「悠暉ー」

ふと遠くから紅科の声が聞こえた。

無意識に振り返つて見れば、髪の毛を振り乱し、息を荒げながら走つてくる姿が小さく見えた。

やがて紅科は俺のもとへ駆け寄り、ホウと息を吐いた。

「悠暉、その……」め……

珍しきどもつて喋る紅科。

だが今はそんなので冷やかす気分にもなれなかつた。

ぐるつ、身を翻して歩く俺に、尚も語りかける紅科。

「悠暉！ 本当にあたしが悪かったと思つ。知つてたよ、告白だろうなつて…」

冷静でいられない。

頭にカツと血が上る。

何で、見当ついてたのに邪魔したんだよ…！

紅科の手が伸びる。

「さわんなーー！」

ビクッと体を強張らせる。

ちらりと田に入つた、紅科の表情が…、

とても怯えたようなその顔が、何とも俺の苛立ちを倍増させる。

「ふざけんな、てめえ…！ 知つてたんだつたら入つてくんじゃねえ…！」

少しだけ触れた紅科の指先をちぎれんばかりに振り払つ。

「ひ……！」

小さく漏らしたその声が聞こえなかつた訳では無かつたが、足早にその場を去つた。

その時、紅科の大きな瞳から涙が零れたのを。もちろん俺は、そんなこと知る由もなかつた。

「悠暉ー！ テスト結果張り出されてる、見に来いよー。」

紅科と口をきかなくなつてから2週間が過ぎた。

パシリから解放された俺は、少しづつではあるが、周りに人が出来はじめていた。

紅科の影響も大きかつただろう。

そこまで考えが至つたところで、紅科が思わず思考に入ってきたことに苦笑が漏れる。

「なあ、悠暉つてばーー」

「おー、今行くー」

1	姫澤 咲	486点
2	神御藏 紅科	478点

：　：　：

「…………は？」

「紅科チヤン、一番じゃない…………」

見れば、周囲も少なからずざわついている。

さらに見渡してみても、紅科の姿は見当たらなかつた。

いつもならぶつちぎりで500近く獲る紅科が478点つて…………。

や、まあ十分にす”といけど…。

結構真剣に考え事に耽っていたのだが、隣ではみんな香氣にもつ違つ」とを語り出している。

「てか、この姫澤チャン?^{ひめさわ} 咲チャン?^{さき} すげえ……！ そして
超かわえーーー！」

「あー、俺も思った！ ゼットー可愛^{かわい}いよなア、逢いたい！」

「運命よ！ 神よ！ 彼女と俺を引き合わせてーーー！」

いや名前かよ！

名前オンリーかよーーー！

会つたことねーのかよーーー！

どんな娘かと思つたわ！

「なあ、悠暉^{ユウヒ}ー！」

「ん？ 俺はいかがわしい」とは考えてません！

「あ？ 何言つちやつてんの、お前突然^{トコトコ}……いかがわしい」と考
えてたんだ？ な？」

「考えてねーつてー！」

突つかかってきたのは、最近よくつるむ^{あがつま} 我妻^{あがつま} 恭慈^{きょうじ}。

くだらない言い合いが揉め事に発展してしまった。

どうせ小突き合いで終わるのだろうと思つていたのだが、我妻から
予想外な言葉が飛び出た。

「じゃあ、紅科チャンのコトでも考えてたのか??」

途端、準備していた言葉を飲み込む。目が見開かれるのが自分でも分かる。

同時に自分の単純さに腹が立つ。

「やつぱりな

「は？ 何で俺が紅科のことなんか考えなきゃいけねーんだよ」

咄嗟に口を突いて出た言葉は、小学生の語るそれよりも幼く感じた。少々上擦った声が、よつよどもらしさを演出していた。

「だつてお前、氣づいてないかもだけどよ、いつでも紅科チャンのこと探してみやせっ？」

そして、耳元でぼそりと呟いた。

「2週間前から……な

そして、俺の顔を覗き込み、ニヤリと笑つ。

そして徐に口を開き、ポンと背中に手を置いた。

「俺、こんな時の為に紅科チャンの居る場所、リサーチしとから行ってくれば？」

ゆっくりと我妻を振り返れば口元に弧を描き、優しい微笑を浮かべていた。

長い付き合いでもないのに、じこまでしてくれたヤツって、正直あんまりいない。

素直に良い奴……と感動していれば。

「つづー」とで？ 悠暉に協力したから、俺にも協力してね

やつぱり世の中そう簡単にはまわらないらしい。
とはいって、協力してやらないのも酷だろ？

「何？」

「あれ。……姫澤咲ちゃん。どんな子か探しといて～」

そう、息巻くと。

風のように去つていった。
恥ずかしかったのか？

いや、まさか（笑）

まあ、とにかく俺は、紅科の元へと歩を進めた。

「紅科」

普段出入りなんか殆ど無い図書室。

最近はここに入り浸つていたと、我妻から聞いた。

ふわり…、

色素の薄い髪の毛が窓から漏れる太陽の光に反射して、眩しかった。

紅科は、俺を見るとギョッと顔を強張らせ、開いていた参考書の山

をもの凄いスピードで片付け始めた。

「紅科」

もう一度、呼んでみる。

でも、紅科はもう振り向きもせず、片付けも終わってしまった。そして、足早に俺の側を通り過ぎ、図書室から出て行ってしまった。人気のない廊下に、軽快な紅科の足音が木霊する。

ただ呆然と立ち尽くしていただけの俺だったが、自然と体が図書室の外に向く。

次の時には、もう走り出していた。

「なあ！ 紅科つてば…！ 待てよ…！」

かろうじて見えていた彼女の背中はいつしか見えなくなっていた。

そろそろ、帰ったか…。

自分の中でも蹴りをつけ、諦めかけたとき。

幾度も角を曲がり、窓の外を見遣ると、そこには縮こまつた紅科が見えた。

でもそこは、反対の校舎だから、行くのに時間がかかる。

また見つかったら厄介…、そう億劫になつていて俺は、その場所の死角になる場所を選んで彼女に近づいていった。

5分後、やっと着いたそこは駐輪場の傍だつた。

憂鬱に包まれた紅科を見ていて、俺がそんな顔をさせているのかと、落ち着かなくなつた。

すると、風に揺れた、彼女の色素の薄い髪の毛が俺の頬を撫でた。いつの間にか、それほど近くに来てしまつていたのだ。

案の定、振り向いた紅科。

あの心地よい感触が離れていく……。

何故かそんな考えが頭をよぎつて、その場から立ちかけた紅綾の肩を、思わず抱きしめていた。

「？」

小さく、声をあげた紅科。
久しぶりに……、

2週間ぶりに聞け

2週間ぶりに置いた経科の声

どうしようもなく嬉しくて……。

肩にまわる自分の手に、より力を込め、再びギュ、と抱きしめる。

「紅科……、もうちょっとだけ」

紅科からやるせない息が漏れる。

ほほ無意識で、紅科に手を伸ばした。

さつと、この時から…。

とぐく心は動かしていったんだ。

第4話 黒い会長と空っぽの一週間（後書き）

急展開でした、

今まで更新が無かった分

一番私が焦っているのかもしれません（^—^；）

本当に

申し訳ありませんでした。○○

第5話 黒い会長と仲直り（前書き）

前半は微シリアスです。

後半は……、いつものテンポですかね（^—^；）

第5話 黒い会長と仲直り

トク、トク、トク、トク……

俺と紅科の鼓動が重なって、気持ち良いリズムを刻んでいる。そつと瞼を伏せ、響くその音に耳を傾ける。

速くなりつつある鼓動を、自分だけのものにしたくてもう一度、強く腕に引き込んだ。

小さく聞こえた声に、聞こえなかつた振りをして。

だが。

そんな時間は一瞬のうちに粉々になつた。

紅科を抱き寄せた時には、もう欠片も残つていなかつた理性が、チャイムによつて無理矢理引き戻されたのだ。

それは紅科も同じだつたらしく。

バツと、俺たちの体は電光石火で離れた。

そして勢いよく振り返つた紅科の長い髪の毛が俺の頬にバチンと当たつて、

「でつ……」

平手打ちされた気分になつた。

「うわあ！ ごめん悠暉！ 超痛かつたよねー！」

そう言つて、再び俺に触れる紅科。

まあ、当然の如く顔は近づく訳で。

この場合、俺は不可抗力。
断じて不可抗力。

だから、顔が赤くなつても仕方ない。

つつつても、俺は紅科の髪の毛打ち食らつてたから別に不思議では無いんだけど……。

だからといって、紅科の頬が真つ赤になるのを近くで見て、平氣でいられる訳もない。

「つー」

たぶんむつ、俺の顔もゆでだこ状態。

髪の毛で赤くなつたといつこには、不自然なくらい赤いだろつ。

……とまあ、そんなこんなで場の空氣は和み。

何となく、俺と紅科は仲直り出来たみたいだつた。

だけど、俺は何となくで済ませるのがイヤだつたから、謝つた。

「紅科……、あの、わ…。俺も言ひ過ぎたとこあつたから…、その、ゴメン…」

ちよつと言ひ訳みたいになつてしまつたけど、伝えたかったことは伝えられた。

「うん、あたしが悪かったわけだし。……ゴメンね」

改まつて謝りまくる俺たちは、きっと端から見たら変人同士。
だけど、そんなこと今は微塵も興味ない。

どちらともなく笑みがこぼれる。

その和んだ空気が何にも変えがたく心地よかつた。

紅科と居てこんな気持ちになるなんて思つても見なかつた。

俺の前では、偉つそつな態度じてゐるべせり、何どひが……、」

卷之三

しおりしがを…、感じてしまつたからだらうか。

“女子”……つて感じ？

- 1 -

おし！ リセット完了！！

何なんだ、この、“意識しちやつてるな俺……”。な流れ！？

心の中でシャウトしまくる俺に、紅科が声を掛けた。

「ねえ悠暉」

ケンカの仲直りがたつた今だつたからだろう、微妙に気まずさが残る声色で遠慮がちに言葉が紡がれた。

「あ？」

だが俺は、自分の反応にも

紅科のしおらしさにも

びつしそうもなく腹が立つていて、きつと声を掛けるのにももの凄く勇気が必要だつただろつ紅科に怒りをぶつけてしまつた。

「！？ 何なのよそれ！ あたしが声かけてやつたつてゆーのに！ ……このつ、悠暉」ときが！」

どうやら俺は、人を苛つかせる方能を持つているらしく。

厄介なスキルだ。

紅科を煽つてしまつたようである。

……でも、さ……。

ちよつと言ひ過ぎじゃね？

リアルに傷ついた。ナニ“悠暉”とき”つて？

反発しよつとして発し掛けた声が喉の奥で消える。そんな様子を見て焦つた紅科が、慌てて否定する。

「つていづのはウソだよ！ 悪かつたわね！ ……ちょ、何田え潤ませてんのよ、ホントなよつちいわね！」

そしてまた、あ、コレもウソよバー！ と直す。

本当にこいつは、人をけなしてんのか、素直になれないのか……。でも、こんな紅科見れるのは俺だけなんだよな……。

人は知らない紅科の本当の姿を、俺だけが知つてると考えると、誰に対しても分からぬが優越感が生まれて、勝ち誇つた気分になつた。

「な、紅科……なんか奢つてやるよ

不意に口を突いて出たその言葉に、紅科が元々大きな田をさらに大きくしている。

そりや そうだね！

今まで俺は、パシリ生活一筋だったから金欠が当たり前の状況だった。

それが今は、奢ってやれるほど懐の大きな男にまで成長したのだ。紅科が俺の成長に感動しているのも頷け……

「なんだその上から目線！ あんた勘違いしてるー？」

いやそっちかい！！

俺の大人の階段んんん！！

もはやスルーの域を超えてますよ紅科さん。

俺、何気に結構HP削られてるからねー！？

「あ、わり……じゃあ、その、俺……、帰るわ

そんな、迷惑掛けて喜ぶヤツじゃねーし……、とその場を立ち去りかけたら。

「はあ？ なんか奢りたいんでしょ？ 付き合つてあげるわよ、しょーがないからー！」

俺は、今更ながらやつといいつの性格を理解した。

そう、多分こいつ……、俗に言つ“シンデレ”つてヤツだ。

そして、その方程式も完璧。

『紅科（素直じやないヤツ）＝シンデレ』

出来た！－

「で？？」

「は？」

互いに疑問をぶつけ合つ俺たち。
てか、俺がやつすに考え方してたから聞いてなかつただけかもしれ
ないけど。

「ビ」連れてつてくれるの？」

心なしか、紅糸の口の端が微妙に上がつてゐる気がする。
ぜつて一俺のことなめてる！

（こうなつたら、もうプライドが許さないぜ！（俺にもプライドは
あります）

ちょっと高めの店だがしようがない。連れてつてやるーじゃあない
か！！

「……駅の近くに出来た、あの」のフアリースでビード

「ふーん。ま、いんじゃない？ お金は足りるのか知らないけど」

クッソ、語尾にハート付くような喋り方しがつて。
意地でも間に合わせてやる。

「で？？」

「は？ またかよ」

内心、面倒くセーと思こながら聞こかけぬと、

「だーかーりー！ ビツサツて行くのかつて聞いてんのよー。」

「は？ お前ん家迎えに来るんじやねーの？ あのでつナーリムジン」

「バカじやなーのー もつ売下過ぎかうかうつて帰つたわよー！」

「で、電話掛けねーじやん」

「こつも勝手に来るから、電話番号なんて知らないわよー。」

「いやせこせりすんなやあーー ビーすこのお前、俺つこで乗つてこつと画策してたんだけビー？」

「だから知らないわよー そもそもあんたのせいであたしまで遅れちゃつたんじやないのー。」

「お前が原因つべつたケンカだらーがー！」

ハアハアと息を切らして、怒鳴り合つた俺と紅科。すると、紅科がハツとしたように俺の方を向く。

「あんたさあ、こつも学校ござつて来てんのよ」

真つ直ぐ俺の田を見据える紅科。

「あ？ チヤリだけビー…………あ

「決まりね。乗せなさいよ」

ヒーリック「コ、微笑んだ。

まったく…。

この笑顔を“天使”だとほざくヤツはどこのだよ。
俺には悪魔にしか見えないがね。

第5話 黒い会長と仲直り（後書き）

なんだかんだで第5話です。

ここまで読んでくださってありがとうございます（――）

第6話 黒ご令嬢と恋の匂の匂（前書き）

遅れてしまつて申し訳ない。——

後半はマジシリアスです。

中篇予定なので、展開早いんですけど、我慢してください。——

「ちょっとー。」

すぐ後ろで紅糸が怒鳴っている。

「もうちょっと丁寧な運転出来ない訳ー？ あたしがか弱いの知つてんでしょうー？」

「うるせーーー！ 元はと言えばお前が自分の電話番号知らねーのがわりいんだるー！ つていうかお前、自分がか弱いとか思つてんのー？ それは俗に言つ、『勘違い』つてヤツだ！」

「うーーー！ うるさこわねーー！ 電話なんて普段しないんだから当たり前でしょー！」

「いや当たり前じゃねーよー！ お前、相当イタイわー！」

今、俺たちは駅前に行くための近道を通過している。だがこれが、とんでもなく道が悪く場所であった。もの凄く急な坂道を飛ばして走っているため、会話は大声でなければ通じない。

……とはいえ、俺、ここ通つたことないんだよね。
テへ。

……あ、気持ち悪い？ 分かった、やめるね（涙目）

まあ、紅科が尋常じやない方向音痴を遺憾なく発揮してくれたので、結局道に迷つてしまい、誰も通りたがらないこの歪な形をした近道に来た…というわけだ。

幾度お前のせいだと言つても、彼女の「力過ぎるプライドはそれを認めたくないらしい。ホント、何から何まで困つた女である。

自転車に乗るとか言つたときの「こいつは超可愛かったの！」。

+++++

「なーにやつてんだよー。早く乗れつてー！」

俺は、自分の自転車に跨がり、紅科に向かってぼやいている。最近はパシリとして扱われることが少なくなつたため、金魚のファン的な頻度で“パシリ”の後ろに引っ付いてきた“嫌がらせ行為”も極端に減り、俺の自転車の鍵は放課後になつてもまだ生きていた。その自転車の鍵を指に引っかけ、華麗にクルクルと回す。俺つてちよつとカックイー！

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ……」

なぜかモジモジして、目線を逸らす。わざわざかずつとこの調子で、自転車に乘ることを渋つている。
……自分が言ひ出したくせに。

「もつーーから早く乗れつて！」

とつとつ痺れを切らし、紅科の手を取り半ば強引に俺の後ろに導いた。

そして、ストンとつ眞合に荷台のところに反まつた紅科は、今まで渋っていたのはウソかと嘔げり、「こいつた！」と叫んでいた。

「こいつた！ こいつて超痛い……」

今度はギヤー、ギヤー喚き始めた。

そして、体を大きさに揺さぶり、自転車をガタガタ言わす。

「こいつた！ ちやんと掴まれー！」

ジタバタする紅科の手を掴み、俺の腰へ回した。すると、

「ぬおつー！」

奇声が発せられた。

「何なんだよ！ それと、もつと女らしい声出せよー。」

「だつてだつて……」

また急にモジモジし出す。
柄に合わない……。

見ているこいつの身にも若干危害が及ぶわ、コレ。

そう察知した俺は早急に次を促した。

「早くしろつて

一瞬の間。

「は…、恥ずかしい…」

そつと、俯き、黙りこくれてしまった。

ちょこ、今の反則でしょ。

俺の頬、尋常じゃなく熱いんですナギ。

“頬が熱く熱を帯びている”……とかそういう生温い表現じゃねーつてば！

とにかく、何か喋らねば！

赤い顔を隠すようにして、口元を手で押さえて語ると、少し声がくぐもつっていた。

「……、お前に会わせるから。だから、早く乗って

「う、うん……」

いや付き合ったてのカップルか！……！

なんでこんな

“甘酸っぱい青春を謳歌”

みてーなことしてんだ俺！ 相手は紅科だぞー？ よりこもよつてこの「コリラ！」

紅科は、そろそろと歩き出し、ゆっくりと荷台に乗った。

そして、遠慮がちに腕を腰に回してくる。

ちゃんと乗つてこることを確認してから徐にペダルを漕ぎ出す。

俺の音か、紅科の音か分からぬ。

この鼓動は…。

きっと、2人とも緊張してる。

紅科は、思ったよりも軽くて、俺の腰に遠慮がちに絡められた腕は、吃驚するくらいに細かつた。近くにいることを、痛いほど認識させられる。いつもは、近くにいるのに遠く感じる彼女だけ、少しだけ、近づいた気がした。

柔らかい彼女の髪の毛がなびくたびに、何に対しても分からないうが、僅かな優越感が生まれたのは俺の秘密。

自転車に2人乗りして、強く生まれた感情があった。

あれは約4年前の、春。

優しくて、今にも壊れてしまいそうな笑顔が印象的だった。

……「んなに彼女に近いと思つた人間はいない。

この、儂げに細くて華奢なひとを、ずっと探していた。彼女が突然いなくなつた日から、ずっと追い求めていた。

……中学の頃、見失わないうに必死で抱きしめていた、俺の幼く淡い初恋。

毎日羽織つていたカーディガンの綻びを。

振り返るたびに甘く誘うあの薰りを。

その瞳にいつでも宿っていた翳りを。

彼女の面影の全てを…。

俺は忘れることが出来なかつた、ただの一日も。

そして、紅糸を自転車に乗せたこの日から。

俺は彼女を意識せざるを得なくなる。

+++++

すっかり、日も落ちていた時間に出てきたから、間に合ひがどうかは微妙だつた。

…でも、俺の脚力なら大丈夫だつて思つてたんだ。

いや、絶対に大丈夫だつた。

「だけどお前の方向音痴のせいでの俺の計画がバーだよーーー！」

「あたしは方向音痴じゃない！ バカじゃないのーーー！」

8時閉店のこの店は、つい10分前に閉じられていた。
もうダメだ……、俺、ダメだもう……。

心の中で弱音を吐いていたつもりだったのだが、どうやら外にまで漏れていたらしい。

「さう？ 全くヘタレね！ 帰りは私が送るわ、後ろの荷台に乗つて！」

そういうこいつ、スポーツも出来んじやん。

全部任せときや良かつた。

女に頼るなんて情けねーけど、疲れたからじょーがない、うん。

「マジ? んじゃ任せたわー、ヨロシク」

「ハーイ」

何故だか上機嫌になつた様子の紅科。

俺は荷台に乗つて、紅科の背中に縋りついてしまった。

「は、悠暉! ? ちよつと、何してるのよ! ?

紅科の声が聞こえたけど、そんなのお構いなし。

俺は深い眠りへと誘われた。

それから幾らくらいたつたのだろうか。

遠くで俺を呼ぶ声が聞こえる。

「悠暉ー! 起きてよ! あたし、道分からなくて…。助けてよー」

なにやら途方に暮れている様子。
誰、だろ? 。

細いシルエット。
まさか…、

「い、の…り…?」

無意識の内に紡がれた言葉。

4年前の清らかな思い出……。

阿澄 あすみ
祈 いのり

これが、彼女の名前。

……俺の初恋の人。

相手の姿を確認する前に俺は再び闇の中へ葬られた。

一瞬開けた意識の中で、紅糸が視界の隅に映った。

だけど、その端正な顔に浮かんだ表情に、俺は気づかなかつたんだ。

ただ、祈の姿が少しでも垣間見えたことが、死ぬほど嬉しかつたら……。

まだ、俺の中の彼女の影は、拭えない。

第6話 黒い会長と初恋の日の面影（後書き）

ホントに急ですみませんm(—_—)m

3回までに終わらせたいなと思っていたので、ペースあげていきます！

第7話 黒い会長と失踪した少女 ～過去編～（前書き）

今回は過去編となっています。

シリアルスモードなので、つまらないところの方は飛ばしてください
も結構です。

悠暉と祈の関係などを描いた話ですのです…。

ただ、最後の方は若干未来軸となっています。

いろんな意味で、注意してご覧になつてください。

第7話 黒い会長と失踪した少女 ～過去編～

「祈ー！俺、今日のテスト満点だつたんだー！」

4年前、中学生。

まだ恋を知らない俺。

「悠暉、危ないよ。そんなに速く走つたら転んじゃうでしょー？」

いつも、彼女は微笑んでいた。

この日もケラケラと、飾り気のない声で屈託なく笑う。

「大丈夫だつて。俺、運動神経はいいから」

俺は学ランの胸のところに手を置き、胸を張つて答える。するとまた笑つて俺を喜ばせるんだ。

「うん、そうだね。運動してる悠暉、私好きだなー」

みるみる真っ赤になつていく俺の顔に、彼女は気づいていたろうか。

祈は、顔の赤さと比例するように口数も少なくなつた俺に、優しく笑つて語りかける。

「もうー！悠暉つてば素直なんだからー！」

堅くなつた俺を小突いて、俺の心までもとかしてしまつ。不思議なひとだった。

彼女と初めて会ったのは、中学一年生の時。
同じ学校の同じクラスで、隣の席だった。

「万々原くんっていうんだ。私は、阿澄祈です。ヨロシクお願ひします！」

「冗談交じりに頬を可愛らしく膨らませ、瞬間、弾けたように笑ったのを記憶している。

ただ、その時笑った祈は、何かを必死で堪えているような…。
そんな、今にも壊れそうな笑顔だった。

俺はそれほどに無理していそうな彼女が気にかかり、そしてまた、
知らず知らずのうちに彼女に惹かれていたんだ。

「悠暉、私、桐原くんに告白されちゃったの。」

急に呼び出されて、開口一番に祈は言った。

「私、どうしたらいいのかな。初めてだから、よく分からなくて…」

夏休みのことだった。

中学1年生の頃、俺たちはよく2人でつるんでいた。

「何でそういうの俺に聞くの」

俺でもない人間に好意を寄せられて頬を染めている祈に腹が立つた。俺に見せる笑顔はいつも何かを隠しているのに、この時ばかりは心から喜んでいるのだと感じられて、余計に負けた気になつた。だからきっと、俺の顔に表情は無かつただろうと今は思う。

「悠暉はかつてから、そういうの沢山されるんだろうなって思つて…。だから、こういう時にどうしたらいいのか聞きたくて…」

俺の前で、そういう話すんな…！

段々と理性は失われていくのに、祈にかつこいって言われて少しでも嬉しくなつてしまつた自分に嫌気がさした。

そんな内での葛藤を悟られまいと、余計に不躾な声色で問う。

「祈はや、そいつのこと…好きなの？」

「えつ」

小さく声をあげた、彼女の心を見てしまつたような気がして気分が悪くなつた。

きっと祈は、俺のことなんて何も意識してないんだ。動搖した彼女から言葉を奪つて、俺はその場から立ち去つた。

「祈も、そいつに想い伝えればいいんじゃないの」

苦し紛れに、精一杯の見栄を張つて…。

目の奥が熱くて、鼻がヒリヒリする。

暑さで火照った頬をさらに熱い液体が通り過ぎる。涙は止まなくて、终いには鼻水まで垂れてきた。

……男が泣いてるとか、ホント情けねー…。

祈に対する恋心を、こんな形で自覚することになるとは思わなかつた。

……もう、こんなに好きだなんて、分からなかつた。

「悠暉」

いきなり。

それしか思い浮かばないほどピッタリの表現だと思つ。

そう、彼女はいきなり曲がり角から姿を現し、俺の名前を呼んだのだ。

「いっ、祈！？」

鼻水を啜りながらだつたから、少々声がくぐもつていた。

祈は、肩で大きく息をしている。

「何でここにいんの？ わつき、空き地に居たはずじゃ…」

泣いていることも忘れて素つ頬狂な声をあげた俺。

祈は、気にしていないようで、まだ整いきつていらない息ながらも、俺に説明してくれた。

「後ろから追いかけたら、悠暉に逃げられると思ったから、悠暉の家までの道を近道して待つてたの……」で「……」

一頻り説明を終えた祈は、まるで機嫌を伺つかのように俺の顔を覗き込んだ。

「……なんで、追つてきたの」

体はあまり強い方じゃないと語っていた祈が、俺のために息を切らして走ってきた。

……その事実がもし無ければ、俺はここまで期待することはないがつただろうか。

「私は、悠暉が…………好きだから」

先ほどまで溢れて尚、止まらなかつた涙はいつの間にか止まつっていた。

赤く腫れ上がつた目が乾燥して少し痛い。

「悠暉が好きだから、桐原くんは好きじゃないの……。私、つ私ね、悠暉が好きなの。他の誰も見えないの……。もう、これ以上無いってくらい好き……、好きなのにね、私、悠暉と一緒に居たら、もっと好きになっちゃうの……！ これ以上好きになつて、はる、き、に……迷惑掛けるんじゃないかなつて……怖くなつて、でも、桐原くんに告白されても、悠暉しか好きじゃなくて、悠暉しか見えなくて……、わたつ、私……、悠暉が好きです……！ 死ぬほど好き……」

俺のものだった涙は、彼女のものへと変わっていた。
感極まって泣き出してしまつた彼女を、他の何よりも美しく感じ、そして……愛しいと思つた。

体は言うことを聞かずに勝手に動いて、俺は彼女の華奢な体を抱きしめていた。

すぐに折れてしまいそうなほど細かったのに、柔らかくて、温かくて……。

彼女の小さな手が俺の背中に回ったとき、嬉しそうで、泣き声うなつた。

「俺も好き……祈だけが好き……」

手一杯だった俺は、長い時間を掛けても、彼女に言うことが出来たのはその一言だけで。

それでも、彼女は一生懸命に背伸びして何度も何度も頷いてくれた。

祈は、その後も俺の胸に顔を埋めて泣いていた。

中1、夏。

誰も居ない商店街の裏道のことだった。

「桐原の件はどうなった？」

パンを小さく一口かじって、祈は俺の隣に腰掛けた。

「『めんなさ』って言つてきた

「……そつか

「うん……」

告白から翌日。

俺たちは、校舎の裏庭で昼食をとっていた。

「なあ祈。お前、俺のこと好きって言つてたのに、どうして桐原のこと、俺に相談したの？」

「そ……れは……い、言わなきゃダメ？」

顔を赤くして俯いてしまった祈。

余計に好奇心が湧いてきて、俺を燻る。

「ダメ」

俺を見て何を思つたか分からぬが、祈は教えてくれた。

「えつ、えと……、悠暉がどうこう反応するか、気になつて……。」

今度は俺が赤くなる。
俺……、祈に試されてたつてこと???

「ちやんと妬いてくれたら、私のこと好きって分かるからその時は、昔戻しそうつて思つてて……」

ぐはっ！

俺、祈の思い通りじやんーー！

「で、でもさ！ 俺、帰ったじやん！ 何で俺が祈のこと好きって分かったのーー？」

ちゃんと考えれば分かるはずだったんだけど……。

墓穴を掘った。

「だつて悠暉、追いかけたら泣いてたから……」

あ、あ、あ、あああ穴があつたら入りたいいいいいいい……！
ダメだ！

体中の穴という穴からいろいろな液体が止めどなく溢れてくるよ……。
どーしょ、コレ！
どーしょ、俺！？

「でもね、すつごく嬉しくて、悠暉は泣いてるのに声だして笑っちゃいそうになつて……」

「それつて、俺の泣き顔がウケたからじやん！？」

「ちつ！ 違うよ！ ほ、ホントに嬉しかつたからだつて！」

「ウソだ！ ジャあ何でどもつてんだよ…… 今笑つてんのだつて
隠しきれてねーかんな……」

「ウソじゃないもん！」

裏庭には、俺と祈。

2人の笑い声がいつまでも木霊していた。

この時を最後に、祈は俺の元に現れなくなつた。
学校にも、

俺の家にも、
あの空き地にも、
2人で行った場所のどこを探しても、
彼女を見つけることは、出来なかつた。

俺は今、高校2年生。

あれから4年の時が過ぎた。

実は入学式の時、紅科を祈だと勘違いして声を掛けた。

でも違くて、間違つた俺に優しく丁寧に説明してくれた彼女は、本当に祈に見えた。

今、俺の隣に居てくれるのは紅科。

だから、祈が今どこでどうしているのかは分からぬ。
そして、……分かる必要も無い。

もう、俺と祈の関係は既に消えているのだから。
なのにどうして……。

俺は、思いも寄らない形で再び彼女と関わることになる。
。：

第7話 黒い会長と失踪した少女 ～過去編～（後書き）

長くなり、申し訳ありませんでした（^-^）

これから、彼らはやわらかいくことになるのですが、シリアルは少し飽きたので、こつもの軽いテンポに戻したいと思います！

勝手ですみません（^-^;）

では！

いいで一回切りがつきますので。

いいで読んでもうたわうとあります（*^-^-*）

第8話 黒い会長と衝撃の新事実（前書き）

遅くなりました！

ちょっといつもと比べて短いかもですが、ヨロシクお願いします。

第8話 黒い会長と衝撃の新事実

今俺は、2年1組の教室の前に立っている。

同じ学年とはいうものの……やはり、何とこつか……威圧感？がまつて入りにくいものだ。

それに俺は先日までパシられていた身なのだ。

何かを覚悟するのは自然の摂理ではないのだろうか……？

……というか、なんで俺が1組の前に立っているかというと、紅科との仲直りのぐだり（前々前回辺りかな……）に、我妻と交わした約束のせいである。

『俺は紅科チャンの情報教えるから、お前は姫澤チャンの情報持つて来い』

……って感じだったかな？ うろ覚えだけど。

で、俺は健気にその約束を守るつもりしている訳ですよ。何気にあいつのおかげで仲直り出来たし……、や。

だけど俺はここその後、地獄を見る事になる…………。

煌びやかな笑顔を浮かべた女子3人衆がこちらに向かって歩いてくる。

「あれ……、悠暉くん？ どうしたの？」

なんか怖いんだけど……。

俺は鏡を見ずとも顔が引きつっていることを悟った。

何でだろ「なあ……」俺の本能が告げている。…………逃げる、と……。

「なんか顔青いよ？ 大丈夫？」

うんうんうん、大丈夫だからそれ以上近寄らないで……！

俺の願いとは裏腹に彼女たちは腕を組んでくる。

ちよいちよいちよい……、あんまそのミサイル近づけないで……！

俺、その2つの兵器見るとマジで理性が……！

「おう……大丈夫……」

背中には冷や汗がとんでもなく流れ「ビショビショなんだけど、顔は真っ赤で……鼻血がでそうだ……ま、ミサイルを搭載している彼女が悪いんだけどね……！」

「何の用事？」

両手に爆弾だよコレ！

俺、マジ死んじゃう……！

「ほんにちわー、柚木くん居るかなー？」

……ああまた。

ホント、空氣壊すの大スキだなお前は。

「あ、神御藏さん。資料出来ました。すみません、わざわざ来てくださいなくとも…」

「ううん、いこよ。これ位やうなことね。」

そして、あたかもそこにいることに今気づいたとこったよ!に俺に目を向け…

「悠暉! ? あたしゃひと探ししたのに! パメンねみんな、お邪魔しました」

俺を引きずつてそのままペココとお辞儀をし、教室から連れて行かれてしまった。

…、まあ、ここまででも十分地獄だけだね。
でも衝撃は大抵ラストだから待つててね キヤハ^ ^
うん、ごめんね。もうやめるから。

「また来てなー、紅科チャンー」

「悠暉くん、またおいで?」

「あたしら待つてるからねえ!」

「おー一人さん、また来てね!」

なんだか、結構な歓声に送られたわ。

つて、そこまではイイ気分だったのだが。

扉をガラリと閉めて、紅科が開口一番言つたのは…

「悠暉あんたねえ、バカじゃないのー?」

「…バカですとー?」

言つておくが俺は何気に頭良いぞー!?

「あそこは男も女も肉食系が揃つてんのよ！ そんな中にモヤシのあんたが入つていつたらどうなるか分かつてんの！？ 最後には生まれたての子鹿状態よ！ それに…！ それに…！」

一気に捲し立てておいて、急に語尾を小さくする紅科。
え、なになに？？
きになるじやん。

「言い寄られてへによへになつてんじやないわよー。」

真っ赤な顔で叫ばれた。

「んなつつつ…………！」

さすがにコレは黙つてはいられないでしょ？

「じょうがねーだろ！？ 俺の周りに女なんていな……ゲフンゲフンー！」

遅かつた。

鳩尾に鈍い感触が残る。

悲しいかな、俺はすつ飛ばされた。

「貧乳で悪かつたわね！ 別に悠暉なんかに意識されても困るわよ

！」

心なしか紅科の瞳が潤んでいるように見える。

……のは気のせいか？？

「いやでも紅科はまだ背とか伸びるんじゃね？ まだ発育は終わってね……」

「中学生から止まつてゐるわよ……」

「お、おお……」

為す術なし。

八方塞がり。

……もつと今の俺のためにある。

「で、でも！ 紅科は可愛いから大丈夫だ！」

もう極論です、ハイ。

でもこんなこと言つたら俺がイタいよね？
……言つともりじやなかつたんだけど……。

「つるわせ……」

なんでつりつり……？

またすつ飛ばされた。

すると、トイとそっぽを向き、身を翻して帰つてしまつた。

彼女の長い髪の毛に隠れて見えなくなつた耳が、後方の風に吹かれ
て見えたとき、思わず口の端が上がつてしまつた。

ふわふわ漂う柔らかい毛質の彼女の髪の毛は、午後の陽に照りされ
て琥珀色に輝く。

俺が目を細めたのは、何の眩しさからだつたのだろうか。
じぶんでも、よく分からない。

今度は昼休み。

真面目に姫澤についての情報を得ようとまた1組教室に来ていた。

「あつ悠暉ー！ 来てくれたんだー！」

もう呼び捨てかよ。

場末のチーママ並の声だぞ、甘ったるいぞそれ。

「さつきは会長に邪魔されちゃったけど、ああ……」

グイと近づく顔。

化粧で隠されてはいるものの、肌は『ボボ』している。脳にまで届く、甘い香水のにおいが鼻を突く。

「あたしたちと、楽しいことしない？」

さつきは巨大ミサイルのせいで見失つてたが、あんまり美人ではない。

毛穴から違う。

やはり紅科は美人だ…、差は歴然なんだなと改めて感じた。

「うん、後でな…。それより、姫澤ナントカ、つて人このクラスだよな？ 紹介してくれない？」

「え……、姫澤？ 姫澤に会いに来たの？」

なぜか急激にテンションを落としていく3人。

「姫澤は、あいつだけど……」

その指さされた方向を見たとき、俺は先ほどのテンションの下がりようを理解したのである。

そして、コレが。

冒頭の“地獄”的結末なのですよ。

そこには、筋肉質で、明るい茶金の髪をした男がいた。ピアスを開けていて、制服はダルそうにコルく着こなしている。顔はまあまあ端正だけど…、不機嫌な表情しか浮かべていない。

彼の名前は姫澤 咲といつらじい。

笑えねえオチだ…。

彼の家は、3兄弟で、長男が美稀、三男が真綾といつらじい。全員、女だと間違える名前だ…。

ややこしいのは、もう懲り懲りだよコノヤロウ！

第8話 黒い会長と衝撃の新事実（後書き）

「メテイー要素復活です。

ちょっとオチが酷かつたですかね？」

「ここまで読んでくださいありがとうございました」
と、さすへへ

第9話 黒い会員と金の手札（前書き）

遅れてしまつてすみませんでした。お詫

ストーリーの主題に迷つてしまつて…。

以後、気を付けますので。

では、よろしくお願い致します。m(_ _)m

第9話 黒い会長と全ての引札金

「異議のあるヤツ手えあげてーハイいませんねではこれにて図書委員会会合を了じさせで頂き……」

「頂きません」

放課後、図書室。

俺は何と、図書委員会委員長であつた。（委員会サボつて寝てたらいつの間にか俺になつてた、という笑えない話）

……つていうのは置いといて。

適当に終わらせようと、資料を見ながら棒読みで進めてたら、先公にボコられたといひでした。

「つてえなあ……」

「委員長はこの後中央委員会もあるでしょ？ そつそとパパッと終わらせてそつちに行くつて気は無いの？」

この呆れ顔でもの申す男勝りな女教師は、図書委員会顧問、競技かるた部副顧問で国語科の高梨 莉帆 24歳、独身……。

「何か聞こえたかしら？」

「空耳ですね、きつと……」

たちまち俺の頭上に出現した雪だるま。つてか先生、勝手に人の心読まないでもりえます？ 生徒といえども法に触れますんで。「親しき仲にも礼儀あり」つつ

「あ、人権侵害ツスから。」

「ほひ、ちやつちやとやる！ ナウ！ 中央委員会が待っている！…」

そうそう、中央委員会といつのは、生徒会役員、各委員会委員長、各部活動部長、各学級役員が集まって開く意見交換会のよつなものである。

この会で可哀想なのは、先輩といつねの鬼ども（2・3年生）の巣窟に生まれたての千鹿（1年生）が無慈悲に放り込まれることである。

でも、そんなの知ったこりちやない俺は、どうにかしてサボる策を練っていた。

マジだる…。

副委員長に行つてもうひむつかな…。

「…………なあ、副委員長つて誰？」

「あ、はい。あたしです…」

控えめに手をあげたその人は、明日葉祭、彼女だった。

あ、そうだった…。

俺、委員会一緒にたんじやん。

いやいやいやいや…………、

さすがにこの間の今日でこの展開はまさしくちやんと名簿見ろ、俺！

「ああ～っと…、三口シクな！」

「は…ハイ……」

曖昧な呼び掛けと返事を残して、委員たちはずつと黙つてくつてしまつた。

恐らく

「こいつら絶対そういう関係だわ……」

みたいのを察知したらしい。

いや、みんなが優秀で俺は困らないなあ…、じゃなくてじゃなくて…違うんだ！ 誤解なんだ！！

何とか、何とか！ その事実を伝えたくて半ば強引に持つて行つた。

「え~~~~~と…じゃあ今日の議題な！ 図書室の貸し出し数が減つてるらしい、だからその解決策をみんなに出してもらいたいと……」

30分。

それから俺は真面目に委員長になつて会議を進めた。

「はいっ、じゃあ終わりー！ お疲れつしたー！ 俺はこれから寝て……」

ガコッ

「あせんよ勿論ハイ。」

後輩はみたらしい。

高梨に殴られ、瀕死で泣きすがる俺の姿を……。

「あ～～、容赦ねえ～」

ファイルを持ちながら、中央委員会の行われる会議室へと足を運びながら独言する。

頭はジンジンと熱を持つ。

「普通同じじといやせぬかよ……」

あー、やべ、涙が出ちゃひわ……。

「あ…あのつー！」

後ろから声が掛かる。

少し高い、渴いた声だった。

振り向けば祭がそこにいた。

もう一度呼びかけようとして口を開き、今一度閉じて、舌をペロと舐める。

ちこちな仕草が可愛らしかった。

「万々原くん…、あたし。この前のこと、まだ言い切れて無かつたよね…」

「う、ん」

溢れんばかりの緊張が伝わり、^は気圧される。
鼓動が聞こえてしまうのではないか…。

「だから、中央委員会が終わつたら、話したいの……」

真つ直ぐ。

これまでにみたことのない程澄んだ瞳で俺の目を見据える。

「教室で、待つてる、ね……」

返事をする間もなく、彼女はぐるりと身を翻して廊下を引き返していった。

うわあー！ うわあー！

ついに来たよ、この瞬間が……

人生初告白ですよおお！

背景にお花を浮かべながら緩みきつた顔でスキップしていると、誰かにぶつかった。

不運にも俺はまた同じことを強打してしまつたのだ。

「……つてえ……」

見るとそこには、俺よりも持ち物を盛大にぶちまけた我妻がいた。

「いやお前かよ……！」

普通空気読んだらそこでぶつかるの、新キャラの女の子じゃね？
画的にもむずかしそう、ここで新たな萌えキャラを……ゲフンゲフン

！ ！

「うわちの台詞だわ！ 普通ここでぶつかるのは姫澤チャンジじゃね

！？」「

途中まで、俺と全く同じことを考えていたらしい。だが、内容が変化したときに気づいた。

俺、あの重大事実をまだこいつに言つてねえ…！

「なあ我妻。お前にはオアシスだつたんだろうな…。悪い、姫澤は男だ」

…………。

まあ、こつなるよね

彼の喉から必死に絞り出された声は、信じがたいほどか細かつた。

「……ウソ」

「いや、マジで。パツキンのヤンキー？ つつかチャラ男だつた。がたいま良くてさ、筋肉質で格好良かつたー。」

「…………。じゃあ、名前は何て言つのさ？ あれは“サキ”でしょ？」

「それが…“ショウ”と読むらしい」

カハツ！

掠れた音と共に、吐血しながら廊下に倒れた我妻。すると、最期に俺の耳元に彼の思いを呴いた…。

「……イケ…メ、ン…、爆は、つ…しろ…」

目が本^{マジ}気でした。

ところへと俺は、
放送委員長の我妻が姫澤に木つ端微塵にされて戦線離脱です、
と中央委員会の責任者、田渕たぶちに報告して、自分の席に着いた。
案の定、田渕が理解出来なかつたのは言ひまでもない。

「静かにしてください！ 今回の資料を配付します、意見も述べて
もらひのでよく書き込んでおくつゝにて…」

声が掛かつた当初、微睡み始めていた俺は、ハツと田を醒ます。
そつじやん、中央委員会つてどんな組織だつける？

? 各学級役員
? 各部活動部長
? 各委員会委員長

そして……

? 生徒会役員

こゝまで氣づかなかつた自分の鈍さに腹が立つ。
声の主は、恐るべき仮面令嬢、神御藏紅科。

「会議中に眠り込んだりしないこと… いいですね、…… 万々原く
ん…？」

ドッとい笑い声が上がる。

そんなのはどうでもいい。

俺には祭が待つて いるんだ。

ここを、命を賭してでも抜け出す……

あ、いや、命賭したらダメじゃん。

とにかく！

何が何でも生き延びなければならぬ……！

視界に佇み、俺が決して田線を外さなかつたその先には。
凍てついた瞳で口の端に弧を描く可憐な生徒会長が映し出されてい
た。

（別名、ドウモード）

第9話 黒い会長と金の引寄せ（後書き）

戦慄……！

ここまで読んでくださつてありがとうございます。
これからもよろしくお願ひします（・・人）

第10話 黒い会長と俺たちの純情（前書き）

大変お待たせ致しました。。。

申し訳ありません！

スランプで……；

あ、いえ。言い訳はいたしません！！

すみませんでしたm(—_—)m

第10話 黒い会長と俺たちの純情

何がある……
何がある……！
……なにかないとおかしいんだ……！

中央委員会中、紅科の視線に戦慄してからといつもの、頭の中にはそれしかなく、焦れていた。

……会議の内容は毛の先ほども脳内には滑り込んでいないのだが。「みなさん、起立してください。これで中央委員会の会合を閉じさせていただきます。今日話し合つたことを委員会の皆さんにしっかりと伝えておいてください。では解散です！ お疲れ様でしたー！」

紅科の澄んだ声が会議室に響き渡る。
つづいて、各長たちの声も……。

みんなが席をたつ音が、何とも虚しく木霊する。

何も、無かつた……。

俺は、今まで自分で勝手に思いを巡らせていたことに、羞恥心を抱いた。

自意識過剰、傲慢……。

そんなことばが脳裏に浮かぶ。

行き場のない羞恥と、意識していたのに何もなかつたという疎外感だけが俺のなかで渦巻いていた。

少し火照った顔を隠すように手で口元を押さえ、もはや俺しか居な

いと思つていた会議室後方のドアに手を掛けた時だった。

「万々原くん！　話があるんだけど…」

「ああ、ダメだ。

すぐ反応してしまう。

これは、呼ばれたときの反動だろ？

それとも……、呼んだのが彼女だから……？

「もう少しひー、悠暉ー！　あたしが呼んでるのに聞こえないのー！？」

室内にぐるりと並べられた机の、一番前（通称お偉いさんの席）。痺れを切らし、小さい体を目一杯振り回して叫んでいる紅科がいた。

「…おまえさあ、ホントそんなんでこれから猫かぶつていけんの？」

呆れてしおうがなく漏れたようにしたかった。

でもやつぱり、どうしようもない嬉しさが勝つてしまう。

口元に生まれた僅かな笑みを隠し通せたかは分からぬ。

「あたしが誰だか分かつてんの？　神御藏紅科よ？　もし、あんたがあたしのこと言いふらしたりしても信じるヤツなんて居ると思う？　否ー！　居るわけ無いのよー！」

俺を見下した目で見つめさせら笑うように言った。

ホントに女王みたいな風格を纏っていた紅科だったが、それは急に消え失せた。

眉をハの字にして小さくなる紅科は、先ほどの威風堂々とした姿から思い浮かべれば本当にちっぽけで、情けなく見える。

「……って、……そんなこと……、どうでもここのは……」

俯きながら、俺を恨めしそうに見遣る。
あれ？ 俺なんかしたっけ？？

「な……なんだよ」

すると今度は黙つてくつた紅科。

「どうした？ 具合でも悪いのかよ……？」

本当に心配になつて、俺は俯いている紅科を覗き込んだ。

やつすきた……！

そう思つても、後の祭りだ。

俺と紅科は鼻がぶつかつてしまつほど近くにいて、彼女が顔を上げた瞬間バツチリ目が合つてしまつ。

表現のしようがないほど、お互に顔は真つ赤だつたわけで。

無意識の内に体はサッと離れた。

「べつ……別にどうも悪くないわよー！」

……。

「うわ、何事も無かつたようになつてしまつたよ……」
ほほお、それは良い案だ。
乗らせて頂こい。

「ふーーーん……、なら良いんだだけ、わ……。」

でも、俺ちょっとキツいと思つただけど……。

紅科さん、これで乗り切れますかね？？？

- - - - -

ほらね！！

「暉悠」

- 3 -

勢い余つて振り返ると、そこにはもう先ほどの出来事は鎮火して落ち着き払い、淡々と言葉を紡ぐ紅糸が居た。
あれ？ もしかして意識してテンパつてたの俺だけ？？

「さりと、祭ちゃんと何話してたの……？」

あまりにも予想外な質問に拍子抜けしてしまった。

「ふえつ！？」

「だからつ！ 会議始まる前に2人で話してたじやない！ 何、話してた、のよ」

態度とは裏腹に、語尾も体も小さくなる紅糸。

性格上、
気丈に振る舞うしか出来ないのだろう。

そんな姿に狼狽えて、なんだかドヤドヤしてしまったのでおかしい
んじやないかっ！？

「あー……、多分あれだよ。この間の話の続き、だと思ひけど。……
そこで、中央委員終わつたら教室に来てつて言われたし」

「ふー————ん……」

あれ、紅科さん。

反応が芳しくないですね。

「…………行くの？」

蚊の鳴くような声で、俺に問いかける。

「え！？ そりゃあ、まあ……。この間、どつかの誰かさんに邪魔
されたしね～～」

何だか意味深な雰囲気に飲み込まれたくないで、掠れ気味だつたが
笑いを交えた。

…………。

まつまつまつたく怒る気配がないですね。

あれ、俺コレ地雷踏んじゃつた系？？

ガタッ

情けないことに、一瞬からだがビクツつてなる。

紅科が席を立つた。

俺の方に歩いてくる…………。

そんでそのまま隣に来ればいいものを、1つ席を開けて座つた。

顔を上げない、ずっと俯いている。

「…………あたしとこるの」「…………」
「…………？」

下を向いているから顔が見えない。

そんな可愛いこと言つくなや！ 惣れてまつやおおおおおおおおおおおおお

おおおおおー

やばい、超反応見てえ！

自分の顔も、人に見せられないくらい赤いのに、こんな弱い紅科、
初めて見たし。

いつもの仕返しだ！

「…………行つて欲しくない？…………どうじて欲しいの？」

「…………それ、あたしに聞くの…………？」

色素の薄い髪の毛を、ふわりとかきあげる。

その隙間から、真っ赤に染まつた彼女の頬が覗けた。

そして、やつと顔を上げ盗み見をしているかのよつて、チラチラと
ちらを一瞥した。

するといきなり、紅科の手が俺の頬に伸びてきて……

ハツとしたように手を止めた。

「紅科？」

「…………何」

「具合とか、本当に大丈夫か？」

そう言つた途端、驚いたようにならを見つけて。

それから、どこか寂しげに微笑んだ。

「うふ、平氣。だから、行つてきなよ」

「本当に？ 細いんだから、あんまムリとかするとすぐ体調壊すぞ？」

「ハツ！ 人の心配ばっかしてるからパシリになんのよ。早くしないと、また邪魔しにいくけど？」

紅科は腕を組み、足を組み、俺を見下したように笑つた。
あれ、戻つた。

「あ、あたしも用があつたんだつたー！ ジャあね、また明日ー」

そう言つと、柔らかそうな髪の毛をなびかせて颯爽と会議室から出て行つた。

勝手に足止めして、勝手に帰つていきやがつた。

つか、何も話なんてなかつたんじやん。

ふと窓を見れば、夕日がこれまでに見たことないほど綺麗で。すこし見入つてしまつた。

俺も会議室をでて廊下を走り、教室に向かつた。

会議室の隣の教室に、暇を持て余しながらも帰れずについる紅科がい

る」といふ點に注目せよ。

第10話 黒い会長と俺たちの純情（後書き）

今年一番最後の大仕事でした。

来年もヨロシクお願い致します。

第1-1話 黒い会員と絡まる糸？（前書き）

長らくお待たせ致しました～（*^-^*）
晴れて宿題から解放されまして、疎開（福島県民なもので放射線から逃げよつとw）からも帰ってきたことですので、予告とは違うんですが、早めに投稿させて頂きました！

今回は張り切りすぎて長くなってしまった。

読みづら一のは承知ですが、どうぞよろしくお願ひしますm(—)m

第1-1話 黒い会長と絡まる糸？

さつすが私立高校！

何でこんなに校内がだだつ広いんだよーー！

心中で悪態をつきながら、廊下を突っ走る。

結構本氣で走ったのに、教室に着くまでは3分くらい掛かった。本氣出せば、普通に1?走れちゃうよオイ。

「祭ーー！」

年のせいなのだろうか…。

もう疲労感でいっぱいになつていた俺は、半ばヤケクソで勢いよくドアを開ける。

「キヤーーー！」

大きな“ガラガラ”という音は案外堪えるのかもしれない。祭は頭を守るようにして抱え、金切り声を上げた。

怯えさせたのは俺が悪いけど、でもやっぱおとなしめ女子は違うな。これが紅糸だつたら絶対女らしさの欠片もねえのが吹っ飛んでくるわ。

「悪い悪い、俺！ 僕デースー！」

今は流行を過ぎ去つたどこのかの詐欺のような会話を口元にして、祭を落ち着かせる。

ビビりさせて悪かった、と最後に蛇足する。

でも後々考えれば『待たせて悪かった』だろーー…………と反省。

「な……なんだ……万々原くんか……。ビックリしたあ……」

本氣で悪いことしちゃったなあ……と反省。いやふざけてないよ！？ たまたまなんだからねつー！

と、よく見れば本当に怖かったのだろう、肩が震えてこる。

「委員会、お疲れ様でした。呼び出しちゃつて「めんね」

自分のことは置いておき、他人の心配をする。大和撫子の鑑つていうもんだ。

そんな可愛らしさに、俺は男の本能で動いた。何故か、知らず知らずのうちに祭の方に手を置いていた。祭は驚いて顔を赤くするが、俺は不思議なことに恥じらいを感じなかつた。

「いやホント、遅れて、ゴメン。……それと……」

そして俺は、先ほじから気になつていたことを続けた。

「あの……俺ばっかり『祭』つて呼ぶのイタいからさ、『万々原くん』じゃなくて、下の名前で呼んで」

「え……、あ……、えと、あの……じゃあ……はる、や……」

と、いいまでは良かつたが、やはり祭。間髪を入れずに、

「…………くん……」

と、恥ずかしがって俯いてしまった。
黒くて長い髪の毛を耳に掛ける。
覗けた頬は、真っ赤だった。

「ハハツ！」

そんな姿に堪えきれなくなつて、笑みがこぼれた。

……つて何か最近俺、Sに日覚めてる気がする。大丈夫かな？
大丈夫だよねつ！（汗）

「なつ……！ なんで笑うの！？」

「や……、なんとなく。まあ、それはいいじゃん」

「え……何、気になるよ……」

「いーから！ 気にしなーい！ ほら、それより用事つて何？」

悟られないように…。

そんな下心も無かつたと言えばウソになる。
だけど、本当に楽しみにしていた本題にはやく移りたかった。
俺はもう、ちょっとした変態並に興奮していた。いや気持ち悪いけども…！

「あ……、そうだよね。私、言いたいことがあったの。え、と……」

……

どこのまで純情なのだろうか。

緊張してこらのだらう、祭の視線は彷徨つていた。

「あの……、はる、き、くんの」と、私、気になつて……」

祭……もうちょい！ もうちょいストレートにお願いします……！……って、予想はしてたもの……。

本人に言わると、とてもない破壊力が伴いますな。

「あの……、間違つてたらゴメンなんだけど」

？？？

間違つてたらゴメン？？？

「私、お姉ちゃんがいたんだ。……まやは……悠暉くんと中学一緒にたつて言つてたから、確認したくて……」

祭は尚もモジモジしてこる。

「 「 ……」

沈・黙。

つてか、俺の場合は畳然としてるんだけじね？

「え、あの……それで呼び出されたの俺……？」

思わず……こや、妥当とこづべきだらう。素つ頼狂な声が出てしまつ。

「うん、それでね……」

あれ？

思いやりのある祭ちゃん。

そこスルーするんだ？

何だよ！ こっちはずっと楽しみにしてたんだよーー！

ショックで肩の力が抜ける。

そこで俺は精一杯の落胆のポーズをとった。（頬に手を当て、ムンクみたいにして、イナバウアーよりも思いつきり仰け反ること）

ってあれ？？

何か、会議室の方明かりついてる……。

まだ紅科いんのか？

でも帰つたはずじゃ……？？

そんなことを思つていると、

「この人。分かると思つただけど……仲良かつたつて言つてたし……」

祭はケータイを取り出して操作をする。

ボタンを押す指は、白く長い。

いちいち感情のこもらない無機質な音を聞いていると、何故か無常観を煽られる。

「分かる？……つて今判明しても遅いか」

そう言つて、祭は自嘲氣味に微笑んだ。

いつも憂いを帯びているその瞳に、少しだけ、寂しげな色が見えた
気がした。

「遅い？ 遅いってどうこいつ……？」

そして、俺の目の前にその写真が突き出された。

「お姉ちゃん。私の、お姉ちゃんだよ」

本当、人生って何なんだろう。

今まで生きてきて、そんなこと初めて思つたよ。

別に悲劇だ何だ言いたい訳じゃない。

でも、余りにも不公平だ。

「い、のつ……？」

放心している。

口だって、開いたまま閉じる事が出来ない。

やつと絞り出しあつた言葉は、あまりにも呆けたものだった。

「や……姉妹……？　い……祈は……？　今、ビリに歸るんだよ……？」

何もかも、忘れて、祭の肩を掴み、揺さぶつた。
揺れる髪の毛から、淡いシャンプーの薫りがする。

「ずつと……どこに行つたんだよあいつ……。何してたの……。」「…から近い？　遠い？　祭、早く言つてくれ……！」

今まで音信不通だったことに対する憤り。

やつと見つけることが出来たという喜び。

そして、心の底から湧き上がつてくる愛おしさ。

その全てが俺の中で混ざつ合つ、混乱していたナビ、でもやつぱつ

最後には嬉しさが勝つた。

自分でも単純で安い男だとは思つ。

でも……、それでも……

「死んじやつたの」

は
?

死んだつて
ダレが
?

「私の両親が離婚してて、だからあんまり会えなかつたんだけど……。私も知らされたのついこの前で……。もつ、3年前に亡くなつてたの」

質の悪いウソつくんじやねえ！

そりやあ、もともと体が悪いんだつてのは知つてたけど……。

「お葬式も行けなかつた。……お姉ちゃんね、病氣だつたの。それは知つてたんだけど。でも、病氣に負けないで学校は毎日通つて

たつて……。この間、久しぶりにお姉ちゃんの部屋に行ってみたら、よれた字で『はるきすき』って書いてある手紙を見つけて。きっと、一生懸命辛抱強く書いたんだと思う。それで……私は、思った。お姉ちゃんが頑張ったのは、会いたい人が居たからだったんだ、……って

祈……！

もう、分かる。
ウソじゃない。
祈は。
もう、いない。

「お姉ちゃんは、『はるきくん』の為に、耐えて耐えて……生きてたの……！」

いつの間にか俺も、祭も、涙で顔が濡れていた。
二人して嗚咽を漏らしながら、ずっと泣く。

ああ、また……。

きみはまた俺をこんなに泣かすんだ。

男を泣かせるなんて辱めを、いつも容易くやってのける。

俺は祭を抱きしめた。

どうしてそうしたかは分からぬ。

ただ単に、彼女が好きになつたのだろうか。
何かに縋りたかったのだろうか。
いや、きっと…。

彼女の残り香に、頼りたかった。埋まりたかった。

もう、忘れたつて自分では思つてた。
どうしてきみはいつも、気づかせるのが遅いの…。

急に居なくなつて、責め立てた。

ずっと、憎かつた。

俺、あの時随分荒れてたんだよ、祈。
でも、消せなかつた。この気持ちだけは…。

好きだ。

すきだ…。

死ぬほどすきなんだ…！

会いたい…！

きっといつか、また会えるんじゃないかつて、その時何を言おつかつて…ずっと考えてた。

きみとの未来を…、ずっと考えてたんだ。

ずっと探しめたひと。

ずっと傍に置いてくれたひと。

ずっと、恋い焦がれていたひと。

ねえ、あなたは今、どこにいるんですか？

第1-1話 黒い念想と絡める糸? (後書き)

シコトアスですね~……。

もう「微」を通り越してますね……。

次回は、このお話の同時刻、紅糸のところでは……? と二つ話です。
そうですね、今度は10日でアシマス。

では、いよいよで読んでください! あつがと「ひ」やこれます。お~

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0541y/>

黒い会長とモヤシな俺の498日

2012年1月8日19時48分発行